

座談会

「地域の物語」

出席者

秋田 清・篠藤明德・梶原 博 研究員



「地域の物語」というと地域に伝わる言伝えや伝承を通常意味しますが、「地域を物語る」「地域で物語る」という意味で、地域社会を考えるうえでの「物語」の今日的意義を考えてみたいと、3人の研究員で座談会を企画いたしました。センターの活動舞台でもある別府市、挾間町、佐賀関町などの事例を取り上げながら、語ってもらいました。(編集部)

別府の路地裏散歩と「地域の物語」づくり

篠藤：前回の「地域社会研究」でも報告しましたが、今、別府の中心市街地でまちづくりの様々な活動が行われています。路地裏散歩とか「裏が表になる」路地裏文化祭といって中心地の狭い路地を説明を聞きながら回ったり、竹瓦温泉の前に七輪を並べ「路地裏食堂」と称して秋刀魚を焼いて食べたりします。また、地区の共同温泉をはしごする「温泉道」もスタートし、88ヶ所は入浴したら「名人位」が贈られるといった企画で、いい年をした大人が必死(?)にスタンプを集めています(笑)。こうした活動に参加しながら、昔懐かしい「暮らしぶり」を追体験して、「昔物語」を楽しんでいるわけです。今のまちづくりには、こうした要素が大きいのではないのでしょうか。



梶原：ホームページの作成を中心としながら、私は今、もっぱら挾間町に関わっているわけですが、ここでも今「物語」づくりが問題になっていると思っています。というのも、挾

間町の場合、大分市のベッドタウン化による人口増というプラスの側面がある一方で、それを背景とした町づくりのコアをどこに求めるのか模索中であるという背景があるからです。具体的には、急速な都市化の中で、新旧住民がいかに折り合いながら、豊かな自然環境を享受できるのかが、隣接地域との合併問題の中で、行政や住民の問題意識として現われているからです。

ただ、挾間の場合、豊かな自然だけでなく、そ



れなりの地域の伝統や歴史はあるものの、それらが地域作りにどう生かしていけばいいのかが見えない焦りがあります。だからこそ、われわれ「外」の人間に期待しているし、それをこちらも利用しているわけですが（笑）ただ、1万5千人という人口規模ですから、町ぐるみの物語づくりというのも可能かなとも思います。

篠藤：確かに、規模の問題は大きくて、別府全体としてはなかなか「物語化」できない気がしています。別府全体となると、「物語」ではなく「行政計画」になりますね。ただ、梶原先生がいつも言っているように、挾間町にも、バイパスや国道から1本中に入った、曲がりくねった旧い道の傍らにあるお地蔵さんとか石垣だとか、そこにまつわる謂れ、人々の思い出を紡ぐと結構「物語」の面白さが出てきますね。



秋田：別府の話で面白いのは、浜脇地区の井戸掃除の話ですね。江戸末期からある古い井戸で、若い人がいなくなり誰も掃除の仕手がないというのを聞きつけた人がメールで、今度の日曜日、井戸掃除しませんかと呼びかける。すると、水をくみ上げるバケツはどうしようとか、ポンプはあるよとか、中に入るのを支える竹は私が準備しますとか言って何人も集まってしまう。そこで日曜日の朝早くから汗を流し、その回りで近くのお年寄りがスイカを冷やしてくれる。終わるとみんなでそのスイカをばくつきながら、「あーおいしい」と言って帰って行く。こうした関わりはとても面白いと思います。

自分の内から湧き出してくる「物語」の力

篠藤：秋田先生は、この数年「物語」「地域の物語」について言及されていますが、その中で、地域づくりというときに、外に基準や目標を持って、それに沿ってがんばろうではダメなんだ、と強調されていますね。「物語」というときに、内から湧き出る力みたいなものを感じますが。



秋田：佐賀関町の稲生さんのお宅でホームコンサートが開かれていましたが、音楽好きの仲間が集まり、みんなでワイワイ言いながら演奏したり、当日、関のおいしい魚を食べながら、いろいろなところで輪ができ、自由に話している。また、挾間に古い神社があるでしょう、その来歴は何かな、と物好きが集まってみんなでワイワイ言いながら調べる。こうした中に「地域の物語」があるのではないのでしょうか。

梶原：もちろん、佐賀関には漁師の物語もあるでしょうし、挾間の神社だって、それなりの来歴はあるんでしょうが、そうした事実としての歴史や伝統もさることながら（これもさっき話に出た、作られた、つまり「外の基準」ですよ）、むしろそれを自分で掘り返して楽しむ過程が楽しいですよ。

梶原：もちろん、佐賀関には漁師の物語もあるでしょうし、挾間の神社だって、それなりの来歴はあるんでしょうが、そうした事実としての歴史や伝統もさることながら（これもさっき話に出た、作られた、つまり「外の基準」ですよ）、むしろそれを自分で掘り返して楽しむ過程が楽しいですよ。

そういった意味では、今求められている「物語」とは、いわゆる地域固有の歴史だったり伝統に基づいているというよりは、今ある素材とでもいうか、さしあたりここでは「風景」とか「光景」と言っておきますが、そうしたものを面白がることから始まっている。その意味で、人口規模や歴史背景に関わらず、どんな地域にも通じる「物語」の作り方みたいなものがあるのではないのでしょうか。

今日の「物語」づくりと情報技術

梶原：今ここで議論している「物語づくり」は、情報化と密接な関係があると思います。例えばデジカメのファインダーを通してみる光景は、よく言えば解釈、悪く言えば嘘の固まりなんですよ。富士山を生で見た感動は本質的に個人的なもので、極端な話、誰にも共有できないのですが（逆に一緒にいた人とは共有できるという幻想が生まれますが）、ファインダーごしの「光景」は、「作品」として他人に見せることが（無意識かもしれないけれど）最初から予定されている。デジカメの写真は、ちょっと前にはやったプリクラに典型的なように、もう、その場でまず見て楽しみ、ネットに転送して楽しみ、とにかくみんなでわいわいがやがやと楽しむことと一体となった楽しみ方です。このあたりに、私たちがここで考えている物語の形成と最近の情報化との興味深い関係があるのではないのでしょうか。



篠藤：別府のまちおこしでも、別府八湯メーリング・リストが力を発揮しています。400名を超える人々が毎日見ているとありますが、発言をよくするのは50名くらいです。それでも、1日100本くらいのメールがやり取りされています。先ほどの浜脇の井戸掃除もそのやり取りの中から生まれました。また、別府の内成地区は日本棚田百選に選ばれたところですが、この景観が素晴らしいと誰かが発信すると、あそこには温泉もあるとか、花がきれいだとか、どんどん盛り上がり、みんなで「内成棚田探検」に行こうとなります。そこで取った見事な写真が、すぐWWWページにアップされるのですが、これを見ながら、私は一度も行

ったことはありませんが、「これはもう見事だ」と感動交じりに講演で話したりしますね（笑）。

今まで忘れ去られたものが、このようなやりとの中で「物語」として紡がれていく、という感じがしています。

梶原：そうなんです。提供される体験が「現実」のものかどうかすら関係ない。体験していないから、お話の世界だからこそ、コミュニケーションの中でいくらでもみんなで膨らませることができる。ネットワーク上のコミュニケーションの面白さです。対面でのコミュニケーションとは異なるこうした特長を、篠藤先生は、「叙述の力」というような言葉で説明されていましたよね。

日々の生活の中での「物語」

秋田：昨年末、アンデスの音楽を聞くコンサートが別府であり参加しましたが、ちょっと残念でした。主催者としては、このすばらしい音楽を是非舞台に上げてと考え実施したのですが、何かちぐはぐな感じがしました。やはり、街頭で人々が三々五々集まる中で聞いているという方が感動しますね。どうして舞台にあげる必要があるのでしょうか。街頭より舞台が格上などというのは錯覚ですよ。スイカを食べておいしかったと言い切って終わる、こうした方が何かいい感じがします。今よくホームページで自分の日記というのがありますね。これも「よし、エッセイを書くぞ」と意気込むとなかなか難しい。だから、別府のまちおこしも注目されて東京のテレビに出たということで、がんばり出すとおかしくなってしまうでしょうね。

篠藤：「街頭の上に舞台がある」「地方の上に東京がある」「人がたくさんくるといい」「お金がもっと落ちるようになると活性化した」という図式と自分の内側から湧き出る満足や秋田先生がよく言われる「誇り」というのは違いますね。野上さんが正月、地元新聞で発表した論文の中で「温泉に根ざした生活文化や路地の暮らしぶり」をもう一度見直したいという中に、これまでの「発展＝良いもの」とは全く異なった座標軸を見た感じが

しています。中年少年（少女）がいい年をして路地裏で遊んで喜んでいるという清々しさ（？）に惹かれるわけです。こうして遊んでいると、結果として、一緒に遊びたい人がどんどん増えてくる、大阪や東京からも遊びに来始めています。

梶原：あと、こうした話の延長線上に最近によく路上観察とかウォーキングとかがあって、まあ安直な町おこしの一環として行政や商工会なんかが主催してやっていて、ある意味で画一的で馬鹿馬鹿しいんですけど、この種の企画のそういう表面的な上滑りっぽさが、私は結構気に入っています。「行政主導」というと何となくマイナスのイメージがありますが、こうした画一的で安直なバックグラウンドがあって、逆にそこによってたかってみんなが勝手な物語を作れるのではないのでしょうか。

篠藤：「上滑り」っていいですね。大仰になると、頭の中の知識で作られたという感じがしてきて、その果てに「行政計画」化されたり（笑）。でも、最近まちづくりというよくワークショップが言われますが、とりあえず町を歩いてみんなでワイワイやるのがいいですね。

「地域の物語」と「公共性」

秋田：篠藤先生は、「地域の物語」の中に「公共性」が何かの形であるのではといますが、私はよく「払子」の例を話します。これは実のところ、お坊さんが虫を追いはらうために使ったものですが、あのよう洗練された形ができ、それなりの理屈がつき、しかもお坊さんが使うと何か尊いものだという幻想が作られたわけですね。「物語」の語義にあたる「ものを象る」ように、形が出来上がる過程に人々の想いが作用していったわけです。もともと生活の知恵と技術があった。そこにさまざまな解釈が加わって「物語」が紡がれて行く。しばしば、こうして出来上がったものを権力が絡めとって変質していくことも「物語」の中にももちろん起こってきますが。

梶原：政治の原義である「まつりごと」では、日本の神話を持ち出すまでもなく、「物語」が重要

な意味を持っていますよね。また、何かを排除するために物語が作られたという歴史も確かにあります。

篠藤：権力の問題は確かにありますが、一方最近、ハコモノではなくソフトが大切だとか、住んでいる人々が生き活きとしたまちづくりとか言われています。しかし、言葉は簡単ですが、そうした内面的価値のようなものが人々の間で共有、共感できる形にどのようなになるのか、簡単ではありません。そこで「物語」という時、そこには、共感しながら時間の流れの中で育まれるという感じがして、「公共性」のある部分が柔らかな形で形成されているのでは、そういう力があるのではというイメージを持っています。

秋田：そうですね。昔、左翼は資本制的商品生産（交換）の廃棄ということを語ってきた訳ですが、どうもそうは行かない。商品生産・交換は、実は「自由」の基礎として必要だ。でも野放しでは困る。何らかの「規範」が必要だと考えるようになった。その規範は、私は個人の個人としての「誇り」（「見栄」でも「自慢」でも「楽しみ」でも良いのですが）を基礎として成り立つと思っています。誇りの表明として個人がつむぐ物語の交流として「公共性」は造られて行くように思うのです。



篠藤：すこし具体的な話をしていただけますか？

秋田：挾間町の都市計画の委員会で、公園の話が出ました。丘の上に小さな墓地があるのですが、そこに墓地公園を造ろうという提案がありました。「自分は、死んだ後も、あの丘の上の墓からずうーっと美しい挾間の町を見ていたいんだ」と

おっしゃっていました。たしかに良い眺めです。でも、そこからの景色が、公共事業で金を注ぎ込んで、土建業者が作った町では、ちょっとわびしいと思うのです。

梶原：自分たちの想いがこもっていませんからね。

秋田：そうなんです。われわれが安心できるのは、眺めや景色ではなく、「風景」なんです。「景色」を「風景」にするのは見る主体の問題なんです。河川公園を造ろうという話もありまして、役場や県に何度も掛け合ったけどなかなか実現しないという話でした。私は、自分たちで、大人も子供も一緒になって、造ってしまったら良いと思うのです。安全性の観点から専門家の意見は必要ですが、専門の設計士に頼んで土建業者が造った公園は、たしかに一見美しいけど、すぐに飽きます。自分たちの入りこむ隙がない。

篠藤：別府の井戸掃除みたいに、みんなでわいわい言って造ってしまう。自分たちが造った公園を死んだ後見つける。なるほど、そこに物語がある、と。もっとも、墓の中からは見えませんがね（笑）。

秋田：そう、墓の中からは見えないんです。でも、死んだ後見ている自分を想像する人は現に生きているわけです。だから、楽しく生きたいんです。少なくとも恥ずかしいことはしたくない。「墓の中の自分」は見ることが出来ないけれど、自分が死んだ後の人々は見ることができ、その人々の想いの中に、「自分」は生きつづけることができる。それが「地域社会」だと思うのです。ちょっと宗教が掛かっていますか（笑）？

今、物語を紡ぐということ

篠藤：地域というのはもともと様々な物語を作っていくことで、昔から成立してきたわけですが、ではここで問題にしている物語とはいったいどこが違うというように考えていけばいいでしょうか。例えば、私は「寛容」という言葉が一つのキ

ーワードとなるように思うのですが。

梶原：そうですね。例えば文化とか伝統とか言うとき、そこには確実に共同体を維持するための排除の論理がある。それから、従来の「文化」は、歴史という言葉にこめられた名も無き人々の営みが積み重なって、共同幻想というべきものが作られて、共同体の規範になっていくわけですが、私たちが今、語ろうとしている「物語」には、常に個人の顔やその背後の生活が互いに見えながら非常に短時間のうちに作られていく。また、それを可能にする、情報機器のような社会的装置が用意されている。やはりそうした「生産力」の違いみたいなことを、古い世代の（笑）私は考えてしまいます。

秋田：ちょっと解りにくいのですが、こういうことですか。私は15年くらい前には、「現代は物語の成立しない時代だ」というようなことを言っていました。それは、1960年代までは、近代社会が孕んでいる問題が常に意識され、批判的な活動が行われて来たわけですが、日本に関しては、「社会主義にむけて」ということで、まだ世界（史）が体系的に、あるいは展望を持ったものとして捉えられていた。しかし、その後、少なくともイデオロギーとしては、それは過去のものとなった。その過程で、同時に「科学」とか、いわゆる「体系知」なるものも否定的に捉えられるようになった。

それまであった「確かなもの」、「価値」とか「意味」とか語れなくなった。私は「好きか嫌いかがすべて、ほかには何も基準はない」と学生に語ってきました。「好きか嫌いか」というのは好みの問題ですから、他人に強制するわけには行かないわけです。お互いの好みは認めざるをえない。あとは、折り合いをつける以外にない。

篠藤：「物語」というとき、ニュアンスとして「これは自分の解釈ですからね」「他人に強制できませんよ」という「寛容」の響きがあるように思います。ここに「公共性」を考えるうえで大切なものが潜んでいる気がしますが、当初の予定より話が次第に難しくなってきましたので、これ以上の「哲学的なお話し」（笑）は、また、いたしましょう。